

## 「山姥」の正体

神戸女子大学助教授・古典芸能研究センター長

大谷 節子

「山姥」は、好んで観る作品の二つである。山姥と名づけられる専用面を持つことに顕著なように、シテが他に類曲のない突出した超自然的存在であるのが心惹かれる理由であろうか。もちろん世阿弥が作った時代に山姥の専用面があったわけではないが、鬼面からも姥面からもはみだす存在の大きさを表すべく、山姥の専用面を生み出していった過程そのものが、「山姥」解釈史の二側面を物語っている。確かに何者かであるのに、それを語り尽くせない。その全容を把握し尽くすには対象があまりに大きく、逆に言えば、こちらがあまりに小さい。この作品を観る時には、そうした自己の範疇を超えた圧倒的な存在と対峙することになる。

「山姥」は、古くは英雲外氏が、「幼稚卑俗」ながらも「禅味」を帯びた曲と評し（『謡曲と仏教』大正六年）、香西精氏が「作者と本説 山姥」（『観世』昭和三十八年十一月号）で、「善意に満ちた民話本来の山姥に、禅哲学的寓話の衣をきせ」た「禅趣味」の盛られた作品と形容されて以来、禅味溢れる曲との理解が定着している感がある。

しかし、香西氏が世阿弥の禅的教養の一端を示すものと

して例に挙げられた「善悪不二、邪正一如」の語句は、『風姿花伝』第七別紙口伝にも引かれるものであるが、竹中智泰氏「世阿弥論書における仏教語の研究」<sup>(特)</sup>一（『善悪不二、邪正一如』考）一（『常葉学園大学研究紀要』教育学部 第二十一号別冊 二〇〇〇年）は、この語句が天台教義の根本をなす本覚不二論を示す語句であることを指摘して、「山姥」を「禅趣味」溢れる曲とする理解に疑義を唱えている。確かにこの語句は、『天狗草紙』延暦寺の巻に、「凡そ、天皇、根本大師と御談話ありて、王城鬼門の方に於て邪正一如の宗を広めて、帝位を守る、叡念相比の所なりとて、比叡の号、此の時始まれり」とあるように、天台教学の象徴としてあつた語句であるが、この語句を含め本覚思想そのものが、顕密諸宗、念仏宗、禅宗を問わず席捲し、中世教学が再編されたことを考え合わせるならば、この語句を以て「山姥」を規定することはあまり意味を持たないだろう。

この作品のシテである山姥が、「禅的思想」の「権化」（岩波講座『能・狂言』能鑑賞案内「山姥」）と説明されるのも、全体を「禅趣味」とする理解に依拠しているが、曲中に、シ

テを禪の権化とする記述があるわけではない。山姥を形容する詞章を辿っていくと、まずはワキによって山姥は「山に住む鬼女」と説明されている。ヤマウバ、すなわち「山の姥」の語から想起されるのは、古くは『本朝神仙伝』五に記される都藍尼とらんである。「仏法を行ひて長生するを得たり。幾百年といふことを知らず」、「吉野山の麓に住みて、日に夜に精勤せり」と記述される都藍尼は、女人結界を超え金峰山に登ろうとして、雷電霹靂に妨げられ、ついに頂上へ到ることはなかつたが、「持てる」ところの杖は変じて樹木となり、拘まる」ところの地は陥りて水泉となり、「山をよじ登ろうとした爪痕が残されたという。同じく都藍尼を取り上げる『元亨釈書』卷十八は、最後を「世言、得<sup>レ</sup>長生之道、不<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>終」と結び、都藍尼が、寿命を超越して果てることのない存在と化したことを伝えている。

吉野に限らず山岳信仰の霊地の多くは、女性の參詣登山を禁じていた。こうした霊山の結界を超えて高みを目指した各地の女性は、「トラ」「都藍尼」「止字呂」「融」などの名前前で呼ばれ、志し半ばで石や木に姿を変えて山の一部と化したという伝説を多く残している。霊山の二つ、立山あしくらじ芦峯寺の中宮寺主堂であつた姥堂オンバサマには、三体の本尊が安置されている。この本尊の面相に山姥面の面影を感じ取るのは、私だけではないだろう。山姥なるものの原核には、このように女人禁制の霊地で「仏法を行ひて」「幾百年といふことを知らず」「長生するを得」、寿命を超越して山の二部と化

した都藍尼像があるのではなからうか。

さらに、山姥は、曲舞の中で「念化生の鬼女」と説かれ、終曲部(キリ)においては、「輪廻」を離れることができず、「妄執」が積もつて化生した存在として記述されている。この「妄執」の中身を、曲中では百ま山姥が山姥のことを心にかけてぬことへの恨み、あるいは、「我が名の徳」への執心と説明しているが、これらは、曲舞を舞わせる(ツレ)に曲舞を所望し、シテの移り舞を見せる(ツレ)ための形式的な文言としか思われない。

では、山姥なる「念化生の鬼女」の妄執、山姥となつて化生した「念」とは何であらうか。『日本書紀』神代卷第五段に、伊弉諾尊が軻遇突智命(かぐつちのみこと)を斬り山祇(やまづみ)を誕生させる下りがある。その第八の「書の山祇をめぐつて清原宣賢は次のような注を付している。

山祇トハ、地ヲツカサドル神也。(中略)二塵積テ為<sup>レ</sup>山ノ心也。(伊弉諾尊ノ念ガ五ノ山トナルゾ)八万四千ノ塵勞ハ、一念ヨリ起ル、此ニ念ガ五ノ山祇トモナレリ、山祇ノ祇ハ、罪ノ字ノ心也、八万四千ノ塵勞ノ山ハ、一念ヨリ起ル罪ヨリシテイデクル也。

(天理図書館蔵 宣賢自筆「日本書紀神代卷抄」)

地を司る山の神である山祇に「罪」の語義を重ね、「一念ヨリ起ル罪」が積み重なつて山となり、山祇となると説く。この解釈は、宣賢の父である吉田兼俱から受け嗣がれたものである。

化<sup>ニ</sup>成五山祇ハ<sup>ニ</sup>塵積為<sup>レ</sup>山也、罪ト云ハ<sup>ニ</sup>一念ノ罪ニ依テ、八萬四千ノ塵勞ノ山トナルゾ、ツミト云ハ山祇ヨリ起ゾ。

(天理図書館藏兼自筆「日本書紀神代卷抄」)

また、曲舞冒頭の次第「よしあしびきの山姥が山廻りするぞ苦しき」に、山姥の枕詞として、「足曳きの」ならぬ「よしあしびきの」なる語が用いられているが、天地開闢の重要語句である「葦」をめぐって、宣賢が次のような注を付けているのが興味深い。

神道ニ葦ヲ以テ喩ハ、佛家ニ蓮華ヲ以テ喩ガ如シ。葦ハ善惡ノ二法ヲ名トス。ヨシトモ云、アシトモ云、是善惡不二ノ処也。吾国ヲ葦原ト云リ。天地未分ノ前ハ、ヨシ原也。両儀既二分テ後ハ、アシ原也。是非ハヤ起レバ也。人モ一念不生ノ時ハ、善惡ニ涉ラス、一念忽起ノ時ハ、善惡ニ落ル也。

兼俱の日本書紀研究は、吉田家に伝えられた秘伝に加え、博士家清原家当主宗賢、五山叢林の禅僧の影響を受けているが、最も影響を受けた二条兼良の『日本書紀纂疏』が既に神儒仏三教を調和させた思想を形成している。天地未分以前は善惡不二、邪正一如であり、人の一念が生じ善惡が分かれば、この念より起る罪が積もつて山祇となるという中世の神道説に見られる解釈を以て、山姥の正体を解き明かすことができるだろう。

ところで、クセ冒頭の引歌「遠近のたつきも知らぬ山中におぼつかなくも喚子鳥かな」は、古今和歌集の秘歌であり、

「喚子鳥」は古今秘伝三木三鳥の二である。東常縁から素純に伝えられた『古今和歌集見聞愚記抄』に次のように記述がある。

此歌は元初の一念を読む物也。其一念といふは忽然念起、名<sup>ニ</sup>為無明。無明とは煩惱の事也。はからざるにおこる一念也。喚子鳥とは、此一念によび出さるる所を云也。山中とは高く深き義也。大空寂の所也。爰は更に元来遠近高下の分別なく、はかられぬさかいを、たつきもしらぬ山中とはいへり。おぼつかなくもとは、はからざる一念のよび出す所は、更に思慮せられぬさかいかい也。是元初の一念の端的也。

「一念化生の鬼女」である山姥は、「輪廻を離れぬ妄執」の化生した存在として説かれるが、「一念」とは、常縁のことばを借りれば「無明」、「煩惱」であり、すなわち山姥は煩惱の罪の化生と言ひ換えられる。

一方、山姥は人間に遊び交わり、善を為し正を為す。暮露の虚空坊と念仏者蓮華坊が宗論をする『ぼろぼろの草子』の中で、暮露の虚空坊が、「善惡不二、邪正一如なれば、釣をたるる者なればとて卑しまず。修行する人なればとて貴からず。」と表明するように、山姥こそは、善惡不二、邪正一如を体現した存在であり、山姥の前に善惡邪正の差別など高山から砂の高さを較べみるようなものであろう。